

＜学生レポート3＞

働くことから見いだす可能性～障害者と仕事～

コミュニティ福祉学部
2年 鮎田 好美

今回、二泊三日でどんぐり牧場を訪ね、知的障害をもつ方達と一緒に作業をしました。そして、その中でいろいろと考えましたが、特に知的障害を持つ方が働くということに関心を持ちました。そこで、「障害者と仕事」というテーマに決めました。どんぐり牧場での体験をふまえ、現在の障害者の就労状況、さらにこれからの課題を考えていきたいです。

現在の障害者の就労には、一般就労である雇用・自営・保護雇用と福祉的就労である授産施設（社会就労センター）・小規模作業所などがあります。どんぐり牧場はこの中の小規模作業所にあたりますが、小規模作業所は授産施設や通所更生施設の不足を背景に、とりわけ一般雇用や作業中心の通所授産施設への適応が困難な重度・重複・重症の障害者にとって生きがいのある生活を送るための活動の場となっています。また、社会的体験を広げる学習の場として機能しており、着実に増えています。しかし、法定施設ではないため、運営基盤が極めて脆弱であることから、作業環境の改善や運営の安定化などのための財源確保が課題となっています。さらに、小規模作業所がコミ

ュニティでネットワーク作りに積極的に取り組むことが求められています。

どんぐり牧場は、一つの家族と数人の知的障害者が農業を営みながら一緒に生活しているという、とても珍しい形態をとっている作業所です。農業を営むということは先生がおっしゃっていたように、いろいろな意味を持つと思います。農業は人類が誕生してまだ間もないころから、生きる糧として長く営まれてきました。“生きる”ということに一番身近で、そして何よりも人間的な仕事のように感じます。複雑な機械の一つの部品を作り、一日中単純作業を繰り返すのとは違い、苗から育て成長を見守り、そして収穫するという一連の流れがあります。このことより、知的障害と農業の間に神秘的なつながりを感じます。

どんぐり牧場での生活は、休みの日など自分の好きなときに外出できるなど開かれている面も多くありますが、まだまだ地域に対して閉じられている面もあるように感じます。ワークが一日の大半を占めてしまっていて、また街まで距離があるため、なかなか外の空気に触れることができないのではないのでしょうか。そして、人間関係という観点から考えたときに一番、「閉じている」と感じます。一緒に働いている仲間たちと一家族としか、日常生活の上では関係が持てません。作業所としてコミュニティにもっと開き、他の知的障害の方や子供などと交流を持ち人間関係の輪を広げられたら、このこ

とでお互い刺激を受け、さらに充実した日々を送れると思います。

次に、障害者雇用について考えたいです。最近、日本でもノーマリゼーションの考えが広まり、障害者の人権擁護と自己決定が重視されてきました。知的障害者が職を持ち、地域で暮らすことは本当に普通のことだと思います。アメリカなどでは重度な障害を持っていても、多くの人が働いて、地域で生活をしています。アメリカの方は障害のない人と同じように、障害者に対しても非常に温かい心を持っているように感じます。一方、日本では職を持つどころか、障害者向けの、特に知的障害者向けの職業情報は極めて少ない状況にあります。

なぜ、このような状況にあるのでしょうか？一番大きな原因に、指導者の障害者に対する理解がすくないということがあります。障害をある一面からだけではなく、色々な面から理解しようとする気持が必要なのではないでしょうか。そして、本人や家族とよく話し合い、どのような仕事がしたいのか考えていくべきです。

そして、雇用する側から見たときに、障害者の職業適応の評価枠組みは三つあげられます。一つは、生活自立レベルの達成状況が就労レベルの達成状況と関連しているということです。二つ目は、生活自立を支援する体制が整っていれば、早期に高い就労レベルを達成できるということです。そして、三つ目には生活自立と就労レベルの達成、

ならびに維持には日常的な援助体制が必要であることです。このことから、生活自立と就労レベルが非常に密接に関わっていることがわかります。

人生は社会の大多数の人々が経験するであろう“出来事”、あるいは一定の年齢になるとその年齢に“ふさわしい”行動ができなければならないとして、その社会から期待される“出来事”を節目として、構成されているとみられることが多いです。このような中、知的障害を持つ方が職業生活設計を描くことは難しいと一般に言われています。これには、企業内で生産性をあげることができるのか、生産性に見合った賃金・処遇で生活できるか、キャリアの形成が出来るのか、など様々な要因が絡み合っています。

そして、障害者が職業自立するためには、ニーズに沿った支援が必要です。まず、成人期でも職業自立への挑戦を続ける知的障害者に対し、彼らが引退を迎えるまで支援する仕組みが求められています。そして、生活面では家族や通勤寮の指導者等の、職業面では訓練機関や事業所等の果たす役割が非常に大きいです。次に、就労を継続する上で障害者本人と事業所間の調整をし、職場適応を支援する役割が求められています。さらに、職務の継続が困難になる場合、配置転換や離職の後に新たな場面に適応する上で、障害者本人が事態を受け止めることが出来るような支援が望まれています。このように、職場と生活の場で様々な支援があ

ることで、今まで以上に職業自立が達成できる障害者の方が増えるように願っています。

最近では、新たな就労支援の取り組みが行なわれています。すでに都内のいくつかの区において、いわゆる一般雇用でもなく授産施設における福祉的就労の範疇にも該当しない、いわば中間的な就労形態が開拓し、地域福祉の視点に立った就労支援策を展開している動きが見られます。

これまで知的障害の養護学校の新規卒業者は、授産施設や小規模作業所が地域での受け入れ先として機能してきましたが、年々増加する利用希望者に対応して、新たな作業所等を作り続けるだけでなく、可能な限り新たな雇用の機会へとステップアップを目指しています。

この新たな就労形態は援助付き雇用と呼ばれており、一般事業所への就労において、地域の職場開拓を行なうといった取り組みが行なわれています。指導員あるいは援助者がかなり懇切かつ綿密に就職相談を行なった上、職場探し、職場への同行、通勤援助、職場での作業補助などの援助を徹底しているところが特徴です。

今後の課題は、職場定着に失敗した場合のフォローアップの仕組みを充実させることであり、さらに一般雇用、中間的就労形態、そして福祉的就労の相互間を柔軟に移行できるシステム作りが必要になると考えられています。そのためにも、地域密着型の支援機能

としての連携が重要となってきます。

コミュニティの中で、障害のある人も障害のない人もともに働くことが出来るので、とてもいい傾向にあると思います。こういうことを通して、だんだんと障害者への理解が深まり、障害者が地域で生活することに対しても、温かい目で見守ることができるようになるかもしれません。

今回、どんぐり牧場を訪ねる上での私の目標は“知的障害を持つ方とかかわりを持つこと”でした。しかし、障害があろうとなかろうと人と接することはみな同じだと強く感じました。今まで障害者の方と接する機会がなかったので自分の中で知的障害を持つ方に対して偏った見方をしているのではないかと、と何度も悩みましたが、どんぐりの方と接するうちにこの心配もなくなりました。

どんぐりのみんなが働いたり生活したりしている所を見て、目がきれいだなと思いました。そして、自分に対して素直に生きているという印象を受けました。これはきっと、施設の生活のように受身ではなく、積極的に日々過ごしている証拠でしょう。そして、仕事をして人の役に立っているという、自信に満ちあふれている様子もうかがうことができました。働くということは、自分のためだけではなく人のためにもなっていて、生きていく力を得られることだと思います。

一方、私は二泊三日のワークを何かすつきりしないままに終えてしまった

ような気がします。なんで今草むしりをしているのか、石を拾っているのかと考えてもよくわからず、指示されたことを淡々とやっていただけでした。どんぐりのみんなは自分たちの生活の場を日々努力し、作り上げていっているということは理解できたのですが、私はまだ同じ気持ちになることができませんでした。そして、一人一人とかかわりをもつこともままならず、おしゃべり程度でしか接することができませんでした。ただ、一緒に仕事をし、食事や休憩など同じ時間を過ごせて楽しかったです。ただ、やはりワークのことを考えると“厳しい”の一言でした。どんぐりの方は一生ワークをしながら生活していくのだ、と考えると高齢になっていくにつれ、肉体的にも精神的にもつらくなると思います。軽作業もあれば、そういった高齢の方や女性の障害を持った方も一緒に働くことができるのではないのでしょうか。

指導的な立場にある方が障害を持つ

彼らに対して、仕事の時に少し権力的であるように感じます。仕事の上で軽い失敗をしてしまった時にも、感情的にならず冷静に注意をすべきだと思います。失敗しないようにということは何れもが思っていることですので、何度も叱られることがあったら自信をなくしてしまうのでは、と思います。

“障害者と仕事”について考えてきましたが、何よりも大切なのは私たちの性格がみんな違うように、障害もそれぞれ違うということです。個々のニーズに耳を傾け、何がその人にとって必要なのかと考えていくことで、職業や生活状況がよくなっていくと思います。みんなに頼られ信頼されながら働いていくことで、今まで秘めていた可能性が花開くこともあるのでしょうか。最後に他の場所で生活する知的障害者の方にも、どんぐりのみんなのような眼の輝きとまっすぐさをもってもらいたいと願っています。